

第 51 回日本母性衛生学会

黒石 純子、阿部 晃子、山下 泰子
ピジョン株式会社 中央研究所

演題名:

生後 2～4 ヶ月児の昼間睡眠における入眠時の体温および体幹部・末梢部皮膚温の変化

【目的】

乳児の昼間睡眠時の体温及び体幹部・末梢部皮膚温の変化を観察し、入眠時の体温調整について検討する。さらに寝つきのよさや気質との関連についても検討を行う。

【方法】

生後 2～4 ヶ月児とその母親 5 組対象。対象者自宅にて、昼間睡眠時の児の体温（腋窩式電子体温計）、体幹部皮膚温（鎖骨下）、末梢部皮膚温（足背）を測定した（熱電対・サーモグラフィ）。また児の気質を EITQ（Medoff-Cooper, et al., 1995）翻訳日本語版（江藤他,2000）により測定した。

【結果】

全ケースで抱きを伴う寝かしつけ行動が生じたため、寝かしつけ開始前（前）と、寝かしつけ終了後（後）の体温及び皮膚温平均値を比較した。その結果、入眠に伴い体温は低下（前 $37.4 \pm 0.32^{\circ}\text{C}$ 、後 $36.9 \pm 0.25^{\circ}\text{C}$ ）、体幹部皮膚温（前 $34.8 \pm 0.32^{\circ}\text{C}$ 、後 $35.3 \pm 0.32^{\circ}\text{C}$ ）及び末梢部皮膚温（前 $32.5 \pm 0.72^{\circ}\text{C}$ 、後 $33.8 \pm 0.58^{\circ}\text{C}$ ）は上昇した。サーモグラムにより、前腕・下腿部と比較して、手掌・手背、足背・足底の皮膚温変化が大きい様子が観察された。寝かしつけに要した時間（11～49 分）と体温・皮膚温変化傾向との一貫した関連はみられなかったが、EITQ 全項目平均得点が低いほど末梢部皮膚温の上昇幅が大きく、児の気質と入眠時の体温調整との関連が示唆された。